

中学における国語学習指導の試み

高木 徹

大学受験を控えた、国語の苦手な高校生から「どうしたら国語の成績が伸びるでしょうか。」ということをよく尋ねられる。そういう問いに対してうまく答えることはできないのだが、彼らに多かれ少なかれ共通しているのは、読書量の不足、社会常識の欠如、深く考えようとする姿勢の弱さである。そして、このことは今教えている中学生にもあてはまる。そこで、昭和59年度、中学2年生を指導するにあたって、国語の苦手な生徒を減らすべく、次のような指導を考えた。

- (1) 授業の中に予習の時間を設ける。
 - (2) 授業の中で新聞記事を用いたスピーチを行う。
 - (3) 授業の中に読書の時間を設ける。
- (1) ~ (3)について、順次説明して行く。

(1) 週4回の授業のうち、2回の授業の最初の10分を予習の時間にした。その日に学習するところで、意味のわからない語句を、国語辞典を使って調べさせるものである。もちろん、1週間に10分が2回では時間不足なので、残りは家庭でやるように指示し、時折ノートの点検を行った。

国語辞典をひく作業は機械的なようだが、文章を、考えながら読むための第一歩であると思う。実際に辞書をひきながら考えるところまで行かなくても、中学生の段階で、辞書をひく習慣が身に付けば十分だと思いい、このような指導を行った。

ところで、何も授業の中で予習をさせなくても、一部の生徒は「予習をして来い。」と言うだけで十分であるし、「ノートを点検する。」と言えば、さらに予習をしてくる生徒は増えるであろうが、今回の指導は、そういったことでは予習をしてこない生徒を対象としたものである。アンケートによると「中1の時に比べて辞書をひく回数が増えた。」という生徒が4割ほどいたので、ある程度の効果はあったのではないかと思う。ただ、どのくらいの生徒に、辞書をひくことが習慣として定着するかについては、まだ不安が残る。

問題点としては、どうしても国語辞典を学校へ持って来ない生徒が一部いることである。国語の勉強をする際に、辞書を全然使わない生徒が1割いるというアンケートの結果は、その辺の事情を裏付けるものであろう。

中学生の場合、授業と放課の気持ちの切り換えがなかなかむずかしいものであるが、10分間予習をしているうちに、最初多少ざわついていた教室も静かになり、授業へ向かう心構えができてくる。そういう意味においても、10分間の予習は、全く無駄な時間ではなかったと思う。

(2) 週に1回、男女各1名ずつ行った。発表の順番にあたっている生徒は、事前に自分が選んだ新聞記事を持ってくる。それを教師が印刷しておいて、全員に配布してスピーチを行う。スピーチは、まずその記事を読み（長い記事の場合は、生徒か教師の判断で一部を読む）、それから自分の感想や意見を述べるというものである。

この指導は、人前で話すことの訓練と、自分で新聞記事を選び、また友だちが選んだ新聞記事を読むことで、新聞に対する関心、ひいては社会的関心を高めようという、二つのことを狙ったものである。

普通のスピーチの場合、話し手の声が小さいと、何を話しているのかよくわからないうちに終わってしまうことがある。その点、この新聞記事を用いたスピーチの場合、最初に記事を読むことで、聞き手の側も、話し手が今から何について話すのかわかり、話を聞きやすいというのが長所である。そんなこともあってか、アンケートの結果からみると、このスピーチの時間は、国語の授業の中で最も楽しいものとして生徒に受け止められていた。

問題点を挙げるならば、一つは、自分で用意してきた記事であるにもかかわらず、すらすらと読めない生徒がいることと、もう一つは、記事についての感想・意見があまりに短く、一言、二言で終わってしまう生徒がいることである。新聞記事について意見を述べることは、中学生にとって、かなりむずかしいことなのかもしれない。そういうわけで、話すことの訓練という点では、十分に目標を達成できなかったように思う。

このスピーチが思わぬ話題を提供してくれることもあった。ある時、男女各1名ずつの生徒が選んできた記事が、偶然同じ事件についての、異なる新聞社の記事であった。その時は、スピーチのあと、両紙の違いを生徒に検討させることで、新聞報道の正確さという

ことについて考えることができた。

また、このスピーチは、生徒の興味・関心のあり方を知る上でも興味深かった。生徒が持ってくる切り抜きの中では、何らかの事件・できごとについての記事が多く、中でも、幼い子供や少年・少女がかかわっている記事が目立った。彼らの同世代に対する関心を示すものであろう。

(3) 週に1回、スピーチを行った日は、残りの40分間を読書の時間にあてた。

他に読書指導としては、毎月1冊本を読み、原稿用紙1枚の読書感想文を提出することを義務付けたが、中にはほとんど提出しない生徒もいる。そういう生徒を放っておけば、1年間何も本を読まずに過ごしかねないので、あえて授業の中で読書を行った。

やり方は、全員に文庫本を持たせて、教師が朗読して行くだけである。時折、生徒に読ませたり、質問をまじえたりするものの、ほとんど教師が読むだけで退屈かもしれないと思っていたが、意外に静かに聞いていた。

1学期は、庄野潤三の『夕べの雲』(講談社文庫)をほとんど終わりまで、2学期は、宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』(新潮文庫)の中から「銀河鉄道の夜」と「グスコブドリの伝記」を、3学期は、『オー・ヘンリー傑作選』(岩波文庫)の中から10篇ほどを読んだ。教科書の中では読めない長い作品を読ませようと思って始

めたが、週に1回だけなので、「銀河鉄道の夜」などは話の途中でできてしまうことがあり、読みづらかった。その点、オー・ヘンリーのような短篇や『夕べの雲』(長篇ではあるが、短篇の集積のような構成をなしている)は、都合が良かった。

生徒がまじめに取り組むように、毎回定期テストの出題範囲にも含めた。1学期は漢字の読みだけにしたが、2・3学期は、全体の粗筋や内容を理解していないと答えられないような出題をした。そのせいもあって、試験前に読み返している生徒もかなりいたようだ。

こうした読書指導にもかかわらず、アンケートの結果を見ると、学年が上がるにつれて本を読まなくなっていくという全体の傾向は変わらず、読書指導のむずかしさを痛感させられた。

<まとめ>

(1)～(3)で述べてきたような試みは、教科書を用いた授業の中での工夫ではなく、本来授業時間外ですべきことを授業の中に取り込んだものである。こういう試みによって、特に国語を苦手とする生徒、本の嫌いな生徒に何とか刺激を与えたいと考えて始めたものである。アンケートの結果だけから判断すると、ある程度の効果は上がっているが、それが一時的なものである可能性もあり、どの程度定着して行くかについては、甚だ心もとないというのが現状である。